

「カスミソウ」

— 2 稿 —

2023/8/19

雨森 れに

〈人物表〉

有賀 光男 あるが みつお

(82) 一人暮らしの老人

有賀 和樹 あるが かずき

(60) 光男とあずさの息子

有賀 あずさ

(享年72) 光男の妻

〈ログライン〉

認知症初期の光男が亡き妻の記憶を忘れることに怯えるが、カウンセラーの助言で忘れたくない事を書き留め始める。

〈ねらい〉

伝えたくても伝えられない。会いたくても会えない。
生きている想い人不在の愛。伝えることの大切さ。

1. リビング(朝)

ちゃぶ台の上にカスミソウと書かれたメモと花瓶。中には**白い**かすみ草の**花束**。花卉がいくつかテーブルに落ちている。

風鈴の音。

花が揺れ、花卉がまたひとつ落ちる。

花卉の落ちた先に薬袋と封筒。

2. 光男宅・外観(昼)

蝉の声。小さめの一軒家。門を開ける汗だくの**有賀**和樹(60)。片手で**新聞紙に包まれた**仏花を持っている。

3. リビング(昼)

8畳ほどの和室。壁にはかすみ草のドライフラワーが9束。1列に飾られている。

小さめの仏壇に**有賀あずき(72)**の写真。

仏壇前に座った**有賀光男(82)**が水ようかんを供える。

扇風機にあたる和樹が汗を拭きながら、

和樹 「母さん、水ようかんすぎだったっけ」

光男 「あるからやった」

和樹 「まあ、母さんなら何でも喜ぶかあ」

光男、おりんを鳴らし、手を合わせる。

和樹も汗を拭くのを止めて、手を合わせる。

和樹 「……また外に出るの、やだなあ」

光男 「行きたくねえな。俺も死んじゃう」

和樹 「俺だって嫌だよ。でも、この時間からしか空けられなかったんだった」

光男、無言で眉をひそめ、ちゃぶ台の上に視線を移す。

真新しいかすみ草が入った花瓶、仏花、水ようかん

が置いてある。

和樹 「ほら。行くよ。鍵出して」

光男、ポケットから車の鍵を出し、渡す。
和樹は鍵を受け取り、立ち上がる。
和樹 「先行って車冷やしてくる。必要なもの、もってきてよ」
和樹、玄関へ向かう。
光男、戸棚からビニール袋を取り出し、仏花と水ようかんを入れる。

4. 車内(昼)

一般的な4人乗りの車。バックミラーに色あせたピンク色のお守りがぶらさがっている。
和樹が運転し、光男が助手席に座っている。
和樹 「この車さ、だいぶ古いんじゃないの。買い替える?」
光男 「いい。もう免許も返す」
和樹 「そっか。そうだよな。そのほうが俺も安心かも」
光男、無言。
和樹、光男をちらりと見て、肩をすくめる。

5. 墓場(昼)

砂利道を和樹が歩き、光男が続く。
和樹の手には水桶と紙袋。
光男の手にはビニール袋がある。
和樹 「日差しが痛い。今日ほんとに死ぬ人いそうな暑さだなあ」
光男 「だから言ったろ。俺が死んだらカズのせいだからな」
和樹 「おやじが死んだら? それは母さんが連れに来たんだって」

和樹、笑う。
光男は怒ったように鼻を鳴らす。
× × ×

和樹 「あれ。お墓綺麗じゃん」
墓の周りには雑草がなく、墓石もほとんど汚れていない。

和樹、自分の持つ紙袋を見る。中身は線香、ライター、雑巾。
和樹 「思い出した。去年も綺麗だったわ」

光男 「……さつきとやって、帰るぞ」

光男、足で墓まわりの砂利を直す。

和樹、光男の様子を見て微笑む。

和樹は紙袋を置いて、雑巾を取り出す。

× × ×

光男、和樹が墓に手を合わせる。

光男 「（顔をあげて）帰るか」

和樹 「うん。あ、そうだ。おやじ、カラスにやられるから水ようかん回収して」

光男 「あげたまんまでいいだろ」

和樹 「毎年言ってるけど、今はダメなんだって……」

和樹、何かに気付いた顔をする。

光男はしぶしぶ水ようかんを回収する。

6. 車内(昼)

和樹が運転、光男は助手席。

和樹 「さつき思ったんだけどさ。母さんってあんこ好きだったよな」

光男 「まあな」

和樹 「去年もその前も有名なところの和菓子だったなってさ」

光男 「知らん」

光男、ドア窓ガラスの外の景色を見る。

和樹 「命日の前に掃除しといてくれたりさ。おやじってそういうところあるんだよなあ」

和樹、お守りをチラ見する。

和樹 「このお守りも母さんがつけたまんまだし」

光男 「外しかたがわからなかっただけだ」

和樹 「……おやじが嫌ならさ。免許返さなくていいよ」

光男、横目で和樹を見る。

光男 「家に着いたら、話がある」

和樹 「え？ あ、うん。わかった」

7. リビング(夕)

光男と和樹、座って冷たい麦茶を飲む。無言。

扇風機の風で風鈴が鳴る。

和樹 「……話って？」

光男、立ち上がり、戸棚から封筒と薬袋を取り出す。

光男 「（渡しながら）読め」

和樹、受け取り、薬袋を見て首をかしげる。

光男は和樹に背を向け、仏壇前に座る。

和樹、封筒の中身を見る。目を見開く。

和樹 「アルツハイマー型認知症って……」

光男 「初期だと。先週、ガスコンロの付け方が一瞬わからなかつた」

和樹 「俺だって何かわからなくなることあるし」

光男 「その薬飲まなきゃ、もっと酷いんだろうよ」

光男、線香に火をつける。

光男 「母さんが亡くなって10年。母さんの好きな食べ物や花には自信があったのにな。この前、何を買えばいいのか……わからなかつた」

和樹、壁にある古いかすみ草を見る。

光男 「古い記憶が残るって言うだろ。昔から母さんにいろいろ買ってあげればよかったな」

光男の肩が震える。

和樹、何か言おうとしてやめる。

光男 「わからなくなっていくってのは怖いもんだぞ」

和樹 「おやじ……」

光男 「今後の事は、また連絡する。カズはもう帰れ」

和樹、背中を向けたままの光男をあとに部屋から出ていく。

光男、新しい線香に火をつけ、おりんを鳴らし、手を合わせる。

8. 病院・カウンセリングルーム（朝）

カウンセラーと対面する光男。居心地が悪そうにしている。

カウンセラー 「忘れていく不安っていうのは辛いですね。一番忘れたくない事ってありますか？」

光男 「いや、とくには……」
カウンセラー「そうですねか……もし思いついたら、紙に書いたり、口に出したりするといいですよ。気分転換になりますし」
光男 「はぁ……」

9. 「コンビニ」(昼)

文房具コーナーに立つ光男。

メモ用紙を持ってレジに向かう。

店員 「168円でーす」

光男 「……やっぱりちょっと待ってくれや」

光男、文房具コーナーから便せんと封筒を持ってくる。

10. リビング(昼)

光男が老眼鏡をかけている。手にはメモ用紙とペン。

光男、花瓶のかすみ草を見る。

光男 「カスミソウ。カスミソウ。たった5文字だな」

メモ用紙に大きくカスミソウと書く。

顔をあげ、仏壇の写真を見る。

光男 「そんな顔で見るなって」

ちゃぶ台の上に使せんと封筒を出す。

光男 「初めて便せんと封筒を買った。お前が使ってたのはどこかわからん」

仏壇の前まで行き、仏壇の引き出しを開ける。

中には「光男さんへ」と書かれた古い手紙が一通。

光男、手紙を読み始める。

光男 「……嫌になっちゃうなあ」

光男、鼻をすする。

終わり